

中学校 美術科 部会

部会長名 鷹峰中学校 校長 友松 秀樹

実践者名 方城中学校 教諭 井植 公一

1. 研究主題

「美術科学習指導の中に評価を関連づけていく研究」

～授業の中に評価の位置づけをおこなっていく～

2. 主題設定の理由

(1) 社会の要請と美術教育の方向性

これからの日本の教育は、感性・知識・技能を踏まえた心の教育が叫ばれている。

その為には、生徒自らが学ぶ意欲と喜びを持ち、個性を生かして学習していく過程で、自分のやり方で、主体的に基礎的・基本的な知識や技能を身につけていき、それを通して豊かな人間性と充実した生活を築いていく事ができるような学習指導が展開されなければならない。学習指導要領が目指している「自ら学び、自ら考える力、主体的に判断する力、感動する心、豊かな人間性の育成」など「生きる力」の育成は、まさしく美術の本質と合致したものであるといえる。

(2) 新学習指導要領の中での美術科の意義

美術の活動は感性と知性が一体となって感じ取り、考え・想像を働かせながら全身を使って創造するという、人間の全感覚・叡智を働かせて行う統合的活動である。これからの社会の変化に対応できるように美術の基盤でもある鋭敏な感性で的確にとらえて対応していかなければならない。

また“豊かな人間形成”という生涯学習社会への一翼を担っている教科であることの意義を十分に意識し、実践していくことが大切だと考え、新学習指導要領に基づいた“確かな学び”を美術科の立場からとらえながら、自らの感性、創造性を豊かに育もうとする学習態度と、心豊かな生活を創造していく意欲・態度・情操の育成を図らなければならない。

(3) 新学習指導要領における美術科の目標

学習指導要領の美術科の目標には、生涯学習の基礎として「美術の創造活動の喜びを味わう」ことで、生涯にわたり「美術を愛好すること」を第1のねらいとしており、そのために「基礎的能力を育成する」とある。そこで、その基礎的能力・態度を育成、高揚、獲得を目指していくための具体策として、以下の10点をあげた。

- | | |
|-------------|---|
| 美などを感じ取る力 | (感性、美的直観力、美的感覚) |
| 思いめぐらす力 | (想像力、発想力、推測力) |
| 対象をとらえる力 | (観察力、探求力、形や色の認識力、美の認識力、空間・立体の把握力、分析力、柔軟な見方) |
| 考えを練る力 | (構想力、視覚的思考力、抽象的思考力、判断力、企画・計画力、情報の創造・伝達能力、論理性) |
| 知識・技能を習得する力 | (理解力、技能・巧緻性) |
| 工夫し、発見する力 | (創意工夫する力、改善する力、) |
| 創造表現する力 | (美的造形感覚、構成力、材料感覚、表現技能) |
| ものごとに取り組む力 | (集中力、誠実さ、根気、主体性、自発性、試行錯誤) |
| 作品を味わう力 | (鑑賞力、審美眼、美意識、コミュニケーション能力、情報を読みとる力、批判力) |

関心・意欲・態度・心情（創造意欲、美に対するあこがれや喜び、美術を愛好する、尊重する心情）

3. 主題の意味

（1）学習指導とは

美術科では、3年間の授業を通して豊かな心の形成、能力の形成、態度の形成の三つの側面から、総合的、系統的に資質を育て伸ばしていく事が大切だと言われている。

また一人一人の子どもが人間として成長・発展していく過程を大切にしながら、豊かな人生を形成していくために、想像力を働かせて自分の思いをかたちにしていくことが重要であり、そのためには生徒が表現する楽しさや喜びを味わうことを通して、生涯にわたって美術に親しむ態度を育成することが大切である。

このように、豊かな人間性をはぐくみ、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育成するためには、調和のとれた資質や能力の育成を図り、知覚し感じ取る力、批評する力、構想する力、人間関係を構築する力などを高めることが重要である。

そこで美術科の4つの観点からそのねらいを整理するとともに、それぞれの観点で示された資質や能力が育成されるように、具体的な指導内容や指導方法等を検討することが必要である。また、各科目の評価の観点を踏まえ、生徒の実態や学習内容に合わせた観点別の評価規準を作成し、評価の客観性と信頼性を高めるとともに、生徒の学習意欲を高めるための評価方法を改善し、評価の一層の充実を図ることである。そこで、授業における思考力、判断力、表現力を見取る評価の位置づけをし、個々の生徒の作品制作への糸口としていく。

また生徒自身が表現したい事を主体的に創造していきながら、鑑賞活動を通し、他者に対する理解を深めていく事がより豊かな人間性につながっていく。

そこで今回の学習指導要領の改訂では、子どもたちの思考力、判断力、表現力等を育む観点から、主体的な活動及び、鑑賞活動において、言語活動を取り入れながら、基礎的・基本的な知識・技能を習得させていく事で、思考力、判断力、表現力を高めていく活動を言う。

（2）評価とは

評価とは、子どもの学習状況を知り、学習目標の設定や指導方法の工夫などの改善に役立てるためのデータを得る活動である。

美術科における表現教科では、その評価の根拠がわかりづらいとの声を聞くことがある。それは、ある意味、なじみの薄い、色や形、構成やバランスなどが表現されたものに「感性、価値判断を含んだ、数値化しづらい普遍性」を含んでいるからである。

中等教育視学官、遠藤友麗氏は評価の二側面として量的・解析的评价（定量・分析化できる評価）と質的・感性的評価（総合的、感受・判断的评价）を示している。

評価者が評価についての客観性・妥当性をもつべく、目と心と経験から得た客観的説得力をもった、いわば「職人的な評価の目」ともいえる評価の目や判断力を他の教師と共同で磨いていく必要がある旨を述べ、「評価者（教師）の目と経験知と感性」で感受的に判断して評価することを重視している。

さらに、「思考力や表現において客観的に読みとれる評価は『表現されたものの技能レベルや質や効果から見た適否、構成の良否、雰囲気、場面のとらえ方のよさや特徴、仕事の密度や誠実さ・努力の度合い』などに限られるだろう」と述べており、「間主観的评价」、つまり「『主観を主としつつ、他者の主観とも協調させて主観の中にも普遍性（客観性）をもたせること』」を取り入れ、客観的に評価できる評価と、質的・感性

的評価とを融合・総合させ、評価の観点や評価規準を明確に定めながら、幅の広い観点から適切な評価をしていかなければならない。

美術科の評価では、点数をつけるためのチェック機能ではなく、生徒の学習過程における個性的な良さを発見し励まし、加点していくための窓口、糸口としての機能を重視していかなければならない。

(3) 学習指導の中に評価を関連づけていくとは

学習指導要領の改訂では、能力的目標と態度目標・情意的目標の構造化を図っている。

学習指導と評価は、造形的な創造活動の因果関係にあり、目標構造はすなわち評価の構造でもあるので、美術の指導を計画し、展開するに至っては、教育の内容全体を十分把握し、理解して評価の観点を設定しなければならない。

指導計画の作成に当たる段階において、教科の目標とその構造化、表現の各分野と鑑賞の活動の有機的な組織化を行い、評価の観点、評価項目等を設定しておく必要がある。なぜならば、教科の目標、学習活動、評価活動は一体化され、統合化されていくことが、学習者である生徒一人一人の生き方の活動や行動として期待されるからである。具体的な学習活動の場においては教科・教具まで組織化する事まで含まれている。

教科の目標が実際にどの程度実現されたかについては、できるだけ具体的な観点を設定し、指導の改善を図るとともに、生徒一人一人に学習成果の度合いや状況を把握できるように示す事が、学習活動をより積極的にする事になると言える。

学習指導要領の評価の観点が変更され、「技能・表現」が「技能」となり、「思考・判断」が「思考・判断・表現」となった。これは、言語活動を通し知識・理解を活用して思考力、判断力、表現力を高める学習指導が重視された結果に他ならない。

また「思考・判断・表現」で示された表現は、これまでの「技能・表現」で示された表現とは異なり、「思考・判断」したことの過程や内容がわかるように言語が表現するものであり、学習指導においては言語活動が重視されている。

一方、鑑賞活動において、鑑賞の能力とは芸術的な感受や表現の工夫の能力を生かしながら、芸術作品や文化遺産、芸術的環境、芸術的行為、活動等がもっているよさや美しさ、雰囲気などを味わうとともに芸術文化にかかわる様々な理解や共感をしたりする能力であり、対象のよさや美しさイメージや作者の表現意図や心を感じ取るようにすることが大切である。

また我が国及び諸外国の美術文化や表現の特質などについての関心や、理解、作品の見方を深める鑑賞指導の充実を図るためには、鑑賞を独立したものとして扱うだけでなく、表現活動と鑑賞の能力を相互に高めるために「A 表現」と「B 鑑賞」を関連付けた指導を一層充実させることが大切であり、表現と鑑賞が相互に働きあう中で、作品をつくるという造形的な視点に立って思考を深めさせるといった各題材での学習のねらいが実現できるように学習指導と評価を関連づけていく必要がある。

4. 研究の目標

美術科において、新学習指導要領がめざす確かな学力を身につけるための学習指導と評価方法について究明する。

5. 研究仮説

美術科において、下記のような手立てをとり、言語活動の充実を図った学習指導と新しい評価を位置づけた実践研究を進めていけば、新学習指導要領がめざす確かな学力を身につけることができるであろう。

- (1) 豊かな人間性と感性を高める指導の工夫。
- (2) 言語活動を取り入れた鑑賞活動の充実。

6. 研究の計画（授業の計画）

- (1) 単元「動く絵の楽しさ」
- (2) 単元の目標及び指導計画

単元名	「動く絵の楽しさ」		総時数	4時間	時期	12月
単元の目標	<p>視覚伝達として、表現手段の一つの漫画に興味・関心を持たせ、感じたことや伝えたいことを視覚的な単純化や強調などの技法を使って表すことの楽しさを味わう事ができる。</p> <p>(1) 漫画の描き方を通してセリフの重要性を理解することができる。</p> <p>(2) セリフからイメージした絵を色と形を工夫しながら視覚的な伝達効果を考え創造性を膨らませていく事ができる。</p> <p>(3) 作品の鑑賞から、お互いのよいところを感じ取り、意欲的・主体的にその美しさを味わう。</p>					
評価の観点	関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力		
	<p>漫画の表現方法や文化に関心を持ち、視覚で伝えることの楽しさを味わおうとする。</p> <p>漫画の文化を理解し、その楽しさを味わい生活の中に取り入れようとする。</p>	<p>場面の变化や時間の流れなどから、自分らしい発想を広げることができる。</p> <p>伝えたいことや表したいことが楽しく印象的に伝わるように構想を練ることができる。</p> <p>自分らしい発想を広げ、形や色で美しく表現する。</p>	<p>表現の効果を意識しながら、自分の表現をしていくことができる。</p> <p>単純化や象徴化、誇張などの漫画独自の表現方法を自分なりに工夫して表現することができる。</p>	<p>漫画独自の表現によって伝わる独自の工夫を感じ取り、その効果を理解することができる。</p> <p>友達の作品を鑑賞し発想のよさや表現の工夫を感じることができる。</p>		

《具体的な評価の看取り》

	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
量的・解析的評価 (定量・分析化できる評価)	<ul style="list-style-type: none"> ・学習準備の様相 ・資料収集 ・作品、ワークシートなどの提出状況 ・テスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージマップの量 ・アイデアスケッチの数 ・ブレインストーミングの量 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の数 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・質問に対する回答
質的・感性的評価 (総合的、感)	<ul style="list-style-type: none"> ・学習準備の様相 ・授業態度 ・制作態度・意欲 	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージマップの内容 ・アイデアスケッチの内容 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の内容 ・表現の創意工夫の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・鑑賞意欲 ・鑑賞の言動

受・判断的評価)	・言動・関心 ・作品、ワークシートなどの提出状況 ・自主制作	容 ・ブレンストミグの内容	・作品の内容 ・作品の丁寧さ、美しさ ・用具の扱い方	・発言
----------	--------------------------------------	------------------	----------------------------------	-----

《指導計画》

題材(時間)	学 習 内 容	観 点	観 点	観 点	観 点	観 察 評 価 方 法
導 入	漫画の文化や表現方法について知る。 作家による作品を鑑賞し、表現方法の違いを理解していく。 実技(台詞入れをする) 本単元の内容を理解する。					ワークプリント 2コマ漫画
アイデア スケッチ 着 色 鑑 賞	色彩と形の変化を考えながらワークシートにアイデアスケッチを行う。 ブレンストミグを行わせ、最後に班として1つの4コマにまとめていく。 各班の制作した作品を鑑賞する。					ワークシート (アイデアスケッチ) ブレンストミグ
まとめ	各班の作品について感じた事を鑑賞メモに記入する。					鑑賞カード

7.指導の展開

学習過程	学 習 活 動	指導上の留意点	評価	形態	時間
導 入	漫画の文化や表現方法について知る。	・表現方法(長編・短編・4コマ等)の違いを理解させていく。	関	全	5
	作家による作品を鑑賞し、表現方法の違いを理解していく。 実技(台詞入れをする)	・自分だったらどんなセリフを入れるか、実際に当	発	全	5

	本単元の内容を確認する。	<p>てはめてみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セリフと絵とのバランスを感じ取らせる。 ・セリフ1つでイメージが変わってくる事を感じ取らせる。 			
	セリフからイメージする絵を入れよう。				
展 開	<p>色彩と形の動きを考えながらワークシートにアイデアスケッチを行う。</p> <p>アイデアスケッチの中から1つを着色していく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な見方を考えさせる。 ・セリフにイメージする色を選択し、着色させる。 	創	個	1 5
	<p>《鑑賞活動》</p> <p>描いた絵の説明をする</p> <p>他者の絵を鑑賞し、感じた事を鑑賞メモに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他者にわかりやすく説明させる。 ・自分では気がつかなかった他者のよさを感じ取らせる。 	鑑	全	1 5
まとめ	よかった点と反省点を言う。	・セリフ1つにいろんな見方や感じ方がある事に気づかせる。		全	3

8. 研究のまとめ

本研究では、授業の中で評価を位置づけながら生徒達がより次のステップにおける意欲づけになるような手立てを行っていった。

場面からの台詞入れについては、台詞一つで相手の受け取り方や感じ方が変わってくるので、生徒達が自由な表現活動を行える事ができた。また4コマ漫画の制作では、ブレンストーミングを行わせ、最後に班として一つの作品を完成させ、鑑賞していった。

一人一人がアイデアを考え、制作していくよりも、様々なアイデアを班の中で絞り込みをしていきながら制作していく事で、より説得力のある作品制作ができたと思う。

また鑑賞活動においても、自分たちの作品をアピールしたり、感じた思いを発表するなど、より積極的な表現活動ができたと思う。しかしながらまだ課題もあり、個人レベルの中で、一人一人がよりアイデアを出していくためには、それだけの経験量が必要となる。つまり日頃から漫画などに親しんでいけている生徒とそうでない生徒では、アイ

デアの分量も質も違ってくる。ゆえに、事前により多くの資料収集や資料提示を行っていかねばならないと考えた。

9. 成果と今後の課題

《成果》

- ・生徒がお互いの作品を認め合うとともに、作品づくりの楽しさや難しさを感じれた。
- ・アイデアの出し方（ブレインストーミングや台詞入れの手立て）
- ・感情表現（着色の工夫）の理解ができつつある。

《課題》

- ・資料収集の手立てや資料提示の工夫。
- ・描写力の向上。
- ・表現方法の工夫。

参考文献

- ・中学校美術指導資料「指導計画の作成と学習指導の工夫」 文部省
- ・中学校美術指導資料「美術科における学習指導と評価の工夫」 文部省
- ・中学校学習指導要領解説「美術編」 文部省
- ・学習指導改善のための実践事例集 福岡県教育委員会
- ・新学習指導要領の指導事例集 中学校美術 明治図書
- ・中学校新教育課程の解説 美術 遠藤友麗 編著



資料 1



資料 2



資料 3



資料 4